－所蔵作品紹介－

山口　正城　YAMAGUCHI Masaki

鬼の対話A

おにのたいわA

作品データはこちら

山口正城は1903（明治36）年、旭川に生まれた道北ゆかりの画家です。戦前から抽象美術の世界を開拓し、戦後1959（昭和34）年に没するまで、独自の抽象世界を展開したこの分野のパイオニアの一人です。また、千葉大学工学部の教授としてデザイン界でも幅広い活躍をみせた作家でした。

1926（大正15）年に東京高等工芸学校を卒業後、画壇には1937（昭和12）年、山口正城34歳の時に第１回自由美術家協会に出品してデビューしましたが、この時に出品されたのは「形態第３番」と題されたフォトグラムでした。この事情は、山口正城が早くから当時の前衛的な美術に深い関心を抱いていたことを示すものといえるでしょう。

山口正城はその後自由美術家協会会員となり、戦後は現代日本美術展、日本国際美術展のほか、東京国立近代美術館で開催された「抽象と幻想展」（1953年）や、「抽象絵画の展開展」（1958年）などにも出品し、大きな盛りあがりをみせた当時の抽象美術の代表的画家の一人として活躍しています。

作風はフォトグラムの作品から製図風のカラスロによる幾何学的構成、そして1950年代中頃からはそれに加えて墨などのぼかし、紙のヘラを使って描いた独特の画風へと変化しています。

この作品は、ヘラ描きとカラスロによる構成を結合させた山口正城の作風をよく示すものですが、厳しい直線群と、流動的なヘラ描きの形態との対照がまず目を引きます。本人はこの組み合せを大変重要な構成法と考えていました。ある批評家はこれを「抑制と解放の対応」と呼びましたが、それはまた山口正城の理知と感情との精妙な対応ともいえるでしょう。

抽象美術のパイオニアの一人、長谷川三郎は山口正樹の作品を「音楽的で建築的で、きびしくて大きい構成を持ち」と語っていますが、この作品は小品ながらその骨格を備えたものといえるでしょう。

旭川美術館だより「氷華」No.13（1986.11発行）「収蔵作品から」より